

令和四年度入学者選抜学力検査本試験問題

国語

(配点)

1	30点
2	39点
3	31点

(注意事項)

- 1 問題冊子は指示があるまで開かないこと。
- 2 問題冊子は一ページから十八ページまでである。検査開始の合図のあとで確かめること。
- 3 検査中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、静かに手を高く挙げて監督者に知らせること。
- 4 解答用紙に氏名と受験番号を記入し、受験番号と一致したマーク部分を塗りつぶすこと。受験番号が「0(ゼロ)」から始まる場合は、0(ゼロ)を塗りつぶすこと。
- 5 解答には、必ず**H B**の黒鉛筆を使用すること。なお、解答用紙に必要事項が正しく記入されていない場合、または解答用紙に記載してある「マーク部分塗りつぶしの見本」のとおりマーク部分が塗りつぶされていない場合は、解答が無効になることがある。
- 6 一つの解答欄に対して複数のマーク部分を塗りつぶしている場合、または指定された解答欄以外のマーク部分を塗りつぶしている場合は、有効な解答にはならない。
- 7 解答を訂正するときは、きれいに消して、消しくずを残さないこと。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「蟪蛄春秋を知らず 伊虫^{いちゅう}あに朱陽の節を知らんや。(夏蟬は春秋を知らない。とすれば、この虫はどうして夏を知っているといえようか、いや知らないのだ。)(注1)親鸞(1173~1262)の名著『教行信証』に出ていた言葉である。もともとは『莊子』に由来するこの言葉は、短いのはかなさを語るだけでなく、ものごとを「知る」「知らない」とはどういうことか、ということについての深い含蓄のある言葉である。

夏蟬はたしかに、夏の真つ盛りに一週間くらい地上に出てきて鳴き飛び回って生きるが、しかし、春や秋という季節を知らない夏蟬には、そのみずからが生きている時が夏だとはわからないのではないか、少なくとも季節としての夏というものは知らないのではないかということである。

われわれは、それぞれみずからの世界を生きているが、その世界がいかなる世界であるかは、その世界の中にすっぽりと入り込んでいるかぎり、よくわからない。何らかの仕方ですの世界の外に出て、あらためてその世界を見返したときに、はじめてそれが、何であるかが、ああ、そうだったのか、とわかる。

日本を代表する歌人のひとり、西行^{せいぎょう}の心底にあつて、生涯、彼を突き動かし続けたのは、生きることが夢のようにしか感じられないこの世から「おどろき」目覚めたいという思いであつた。

世の中を夢と見る見るはかなくも なほおどろかぬわが心かな

いつの世に長きねぶりの夢さめて おどろくことのあらんとすらむ

『山家集』

——世の中は夢のようにはかなくも知りつつも、それでもなお「おどろく」ことができない我が心よ。

——いつの世になれば長い眠りの夢がさめて「おどろく」ことがあるのだろうか。

「おどろく」とは、夢から覚めるという意味である。どうしたらこの夢のような世から目覚めることができるのか。二十三歳の青年武士が、妻も子も、エリートコースも捨てて、出家・遁世(家を出て、俗世間から遁れること)し、山里に庵をむすび、旅を重ね、歌を作り続けたのも、この世をこの世として「おどろき」目覚めたい、と願うことであつた。

もともと「おどろく」とは、「オドロは、どろどろ・ごろごろなど、物音の擬音語。刺激的な物音を感じる意がゲン義。」とされ、そこから、「はつと目がさめる。」「にわかにな気がつく。」「意外なことにびっくりする。」「というような意味で使われてきたと説明される言葉である。夢見ているものは、外からの何らかの働きかけなしには、その夢のまどろみから目覚めることはできないのである。

この世に生きることが「夢」のようであるとは、「色は匂へど散りぬるを……浅き夢みじ酔えひもせず。」^(注4)（いろは歌）と長らく歌ってきた日本人には、親しい現実感覚でもあった。

明治日本の新しい文学・思想をリードした国木田独歩（注5）に、「驚異」と題する、こういう詩がある。

ゆめとみるみるはかなくも

なお驚かぬこの心

吹けや北風このゆめを

うてやいかづちこの心

をのき立ちてあめつちの

くすしき様をそのままに

⁽³⁾ 驚きさめて見む時よ

その時あれともがくなり

⁽²⁾ ボウ頭句は、さきに引いた西行の歌をふまえたものである。西行がそうであったように、独歩もまた、生涯、「おどろきたい。」と願った文学者であった。

代表作「牛肉と馬鈴薯（注6）」は、「おどろきたい。」ということを通じて主題にした短編である。主人公は、人生いかに生きべきかの人生論議において、自分は、いつも牛肉が食べられる現実的な成功をめざす現実主義でもなければ、いつも馬鈴薯しか食べられないが夢に燃える理想主義でもないと言う。そのいずれかを論ずる前に、まずどうしても果たしたい大事な願いがある、「びっくりしたいというのが僕の願いなんです。」と語っている。

それは、世間的な習慣や制度的なものの方・感じ方にずつぱりと馴なれなずんでいる自分をあらためて奮ふい起こし、新鮮な感受性をもって世界や宇宙に向かい合いたいという願いである。

「牛肉と馬鈴薯」の主人公は、この発言のあと、みんなに「何だ！ 馬鹿ばか々々しい！」「いくらでも君、勝手に驚けばいいじゃないか。」と揶揄（注6）される。が、自分みずから「勝手に驚く」ことはできない。英語で be surprised と言うように、何か自分以外のものに「おどろかされる」ことにおいて、はじめて「おどろく」ことができるのである。

(4) 西行や独歩の苦心もそこにあった。ひたすらそうした何もかを待ち続けたのである。が、むろんそれは、みずからは手をこまねいて何もしないということではない。まだ来ない「おどろき」へとつねに身と心を開いて待つということであった。すぐれた文学や思想には、つねに何ほどかは、こうした「おどろき」への願いが込められている。

「人生は夏休みよりはやく過ぎる。」という言葉がある。

アンディ・ガルシア主演の『デンバーに死す時』というアメリカ映画(ゲイリー・フレダー監督、1995年)に出てくるセリフである。マフィアがらみの暴力あふれる荒唐無稽なストーリー展開ながら、あちこちに味わいゆたかなセリフがちりばめられており、このセリフも、要所で2度使われている。

——子どものころ、楽しみにしていた夏休みはまたたく間に過ぎてしまったが、人生はそれよりもはやく過ぎ去ってしまうものなのだ、と。

この妙な時間感覚は、むろん物理的なそれではないし、また、十歳の子どもの一年は自分の生きて来た時間の十分の一であるのに対して、七十歳の老人のそれは七十分の一に過ぎないといわれるようなソウ対時間感覚でもない。

夏休みには、それが来るまでの待ち遠しい時間があり、始めれば最初はたっぷりある時間をなかば持て余しながら、あれも過ぎこれでも過ぎしているうちに、いつの間にか残り少なくなった最後の数日で必死に宿題をやっつけて終わる、そしてまた、なつかしい、まぶしいような級友たちの顔と再会して日常にもどっていく、といった、メリハリとリン郭⁽⁴⁾がはつきりとした時間感覚がある。

ならば、人生はどうなのか。この言葉はそのことを問いかけている。この映画では、だから人生はむなししいと言っているのではなく、だからそれを夏休みのように楽しめ、と言っているのである。

それは、かならずしも、独歩や西行らのように、「おどろき」目覚めろ、と言っているのではない。人生には、夏休みのように、それが始まるまでの待ち遠しい時間もなければ、それが終わってから会えるであろうまぶしい級友たちの待つ場もない(だろう)。であるとしたら、夏休みの内部において、それなりの展開を持った、メリハリがあってもいい、それ自体として充実した時間にする以外ない。

「この世が夢のごとくはかなく過ぎ去る。」というのは、その夢から覚めてしまったものの言い方である。いろは歌が歌うように、「浅き夢みじ(浅い夢など見まい)。」というの、すぐに覚めてしまう、その「浅さ」がまずいのであって、むしろそれをさらに、いわば「深き夢」あるいは「濃き夢」へと仕立て上げ、のめり込んでいけば、その夢から覚めることなくそれを充実させることができる。「夢中」になるとは、まさにそのことである。親鸞『教行信証』では、念仏を何回称えれば往生できる、できないということではなく、われわれはただ念仏し続けて、心がほかのことに移ってしまわなければそれでいいのだ、何回念仏をしたなどと数える必要はない、という文脈の中で「蟬蛄春秋を知らず 伊虫あに朱陽の節を知らんや。」

の言葉を使っている。夏蟬は春秋を知らないままに、ただひたすら夏を懸命に生き続ければそれでいいのだ、と。

(竹内整一「日本思想の言葉 神、人、命、魂」による)

(注1) 親鸞||鎌倉初期の僧で、浄土真宗を開いた。(注2) 『莊子』||中国、戦国時代の思想家莊子の著書。

(注3) 西行||平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての歌人。『山家集』はその歌集。

(注4) いろは歌||この世のすべてのものは、永遠に続くことのないはかないものである、という仏教の思想を詠んだ歌。

(注5) 国木田独歩||明治時代の小説家・詩人。「牛肉と馬鈴薯」はその代表作。(注6) 椰掄||からかうこと。

(注7) 荒唐無稽||でたらめで、現実味がないこと。

問1 本文中の、ゲン義、ボウ頭、ソウ対、リン郭 のカタカナ部分の漢字表記として適当なものを、それぞれアからエまでの中から一つ選べ。

- | | | | | | | | | | |
|------|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|
| ①ゲン義 | ア 玄 | イ 現 | ウ 元 | エ 原 | ②ボウ頭 | ア 帽 | イ 冒 | ウ 房 | エ 暴 |
| ③ソウ対 | ア 双 | イ 早 | ウ 相 | エ 総 | ④リン郭 | ア 倫 | イ 林 | ウ 輪 | エ 臨 |

問2 本文中の a から d までの「ない」のうち、**他と異なるものを一つ選べ。**

- a わからない。
b 感じられないこの世から
c はかないものだ
d できない我が心よ。

問3 本文中に、二十三歳の青年武士が、妻も子も、エリートコースも捨てて……旅を重ね、歌を作り続けた とあるが、西行がそうした理由は、本文ではどう説明されているか。最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア 自分が存在している世界に自身がすっぽりと入り込むことによって、この世界が何であるかをわかりたいと願ったから。
イ 何らかの方法で世界の外に出てから再びそれを見返すことによって、この世界が何であるかをわかりたいと願ったから。
ウ 何らかの方法で世界の外に出てから夢の正体を見返すことによって、生きることが夢のようにしか感じられない理由がわかるから。
エ 自分が存在している世界の中の何かに突き動かされることによって、生きることが夢のようにしか感じられない理由がわかるから。

問4 本文中に、日本人には親しい現実感覚 とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。⁽²⁾

- ア 日本人は、現実世界にすっぽりと入り込んでしまい、それにも気づかないまま夢のように生きている。
- イ 日本人は、夢のような世界をより現実世界に近づけるため、色鮮やかな夢を見続ける努力をしている。
- ウ 日本人は、みずからが生きている現実世界に満足しており、旅のように刺激的な毎日過ごしている。
- エ 日本人は、出家や遁世をすることによって、夢のような世界から目覚めることができるかと信じている。

問5 本文中に引用された詩の中に、驚きさめて見む時よ その時あれともがくなり とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。⁽³⁾

- ア 自分だけの力では「おどろく」ことができない状況に腹立たしさを感じている。
- イ 「おどろきたい」という願望にとられる自分の姿に絶望して自己嫌悪に陥る。
- ウ 自分を目覚めさせる「おどろき」の到来を常に身と心を開いて待ち望んでいる。
- エ 「おどろきたい」という自分の気持ちを周囲が理解してくれる日を待ち続ける。

問6 本文中に、西行や独歩の苦心もそこにあつた。とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。⁽⁴⁾

- ア この世の一般的な価値観や常識に反抗し、人に揶揄されても自身の信念を貫き通すためには、新たな感覚で世界を捉え直すことを願いながらも、みずからを「おどろか」す何ものかの到来を望み続ける必要があつた。
- イ 世間の一般的なものの見方に嫌気がさしている自分に気づき、さらに鋭敏な感覚で世界を捉え直すためには、常に新たな作品を作るのと同時に、みずからを「おどろか」す何ものかの到来を望み続ける必要があつた。
- ウ この世で現実的に成功し、新たな表現の世界を作り上げるといふ夢をかなえるためには、ひたすら現実の世界を捉え直すことを願うのと同時に、みずからを「おどろか」す何ものかの到来を望み続ける必要があつた。
- エ 日常の決まりきつたものの見方にそのままなじんでいる自分から離れ、新たな感覚で世界を捉え直すためには、自分を奮い立たせると同時に、みずからを「おどろか」す何ものかの到来を望み続ける必要があつた。

問7 本文中に、それを夏休みのように楽しめ、とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア 人生にきちんと向き合って生きていくことで、日常をメリハリのある充実したものにすべきだ。
- イ 「おどろく」ことをあきらめて夢から覚めずにいることで、かえって味わいゆたかな人生を過ごせる。
- ウ 日常と非日常の時間感覚をきちんと区別することで、日常をメリハリのある充実したものにすべきだ。
- エ 未来を夢見ることを忘れず日常の生活にのめり込むことで、かえって味わいゆたかな人生を過ごせる。

2

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

物理学や天文学の場合、ここでの人間は観測者、すなわち科学者である。一般市民ではない。しかし、これが生命科学の領域になると、観測者だけでなく研究成果の受け取り手として、専門家以外の人たちを含まざるをえないという状況が現出している。

もともとは生物学の一分野だった生物学が、一九世紀に独立した分野となり、生理学、進化学、細胞学、遺伝学、分子生物学と新しい領域を広げていくにつれて、人とそれ以外の生物との境界はどんどん消失しつづけた。この流れは、二〇世紀後半の脳神経科学の発展に至って頂点に達し、基礎研究の成果がそのまま、人間についての言明に直結する^(注1)という事態を招来した。ヒトを対象とする医学と、ヒト以外の生物を対象としてきた生命科学との関係は以前から密接ではあったが、両者が実質的に融合して「生命医科学」となったのは二〇世紀の後半、分子生物学がさかんになってからといつてよいだろう。

①、人と人がハグをしたり、お母さんが赤ちゃんに母乳をあげると、オキシトシンという神経伝達物質が増えて、落ち着いた感情がもたらされる、といった類の研究結果がある。こういった実験の結果は科学的「事実」である、すなわち、価値をともしない中立な事柄である、と研究者たちはいう。それはそのとおりだし、オキシトシンの話は科学的にとっても興味深い結果なのだが、それがひとたび科学界の「外」に出してしまうと、人に関する事実の記述が、たちまちある種の価値を帯びてしまう事態は避けられない。

オキシトシンが出て気持ちが落ち着く⁽²⁾のだから、お子さんをハグしてあげましょう。赤ちゃんには母乳をあげましょう。オキシトシンが出て気持ちが落ち着く⁽²⁾ことと、その状態を積極的に求めるべきだ⁽²⁾ということのあいだには、じつはなんの論理的つながりもない。「気持ちが落ち着くのは良いことだ」という無意識の価値判断や好み^(注2)がはたらいて初めて、つながっているように感じるにすぎない。

価値は事実には還元できない^(注2)というのは、「自然主義の誤謬^(注3)」として知られる、科学的事実を取り扱う際の大原則である。

極端な例を出せば、ヒトラーのユダヤ人虐殺政策は、進化学的・遺伝学的にゲルマン人より劣っているユダヤ人は排除すべきだという話だから、こ

の誤謬を犯している典型的なものだ（もっともこれは、前提となっている科学的事実自体がそもそも間違っているのだが）。「お子さんをハグしてあげましょう」も「母乳をあげましょう」も、ヒトラーほどひどくはないけれども同じ誤謬を犯していて、そのことは、科学者たちがこういう言明が出るたびに繰り返し強調していることではある。みなさん、また同じ過ちを繰り返すんですか、と。

②、ほくたち人間の特異性や性質についての「科学的事実」が世に出たときに、この自然主義の誤謬を犯さないことを求めても、それはそれで無理筋というものだろうと思う。ほくたち自身、そういう「説明」を求めているところがあるからだ。

アメリカの認知科学者デイーナ・ワイスバーグらは、ほくたちは自然現象や心理現象については一段階下位のレベルでの説明（還元論的説明）を欲し、そのような説明が不適切な場合であっても、科学的な用語が使われるだけで満足してしまう傾向——知識の「誘惑幻惑効果」——があることを報告している。

だから、今の世の中、科学的事実の少なくとも一部は、社会的価値と無関係ではいられないのだ。これは科学者、研究者の側の心構えだけでなく、科学知識や技術を使う社会、一般市民の側の心構えの問題でもある。

知識の「誘惑幻惑効果」は重要なので、少し詳しく見ておこう。

ワイスバーグらが最初にこれを報告したのは二〇〇八年。彼女と同僚たちは、イェール大学二年生の秀才たちを対象とした脳神経科学入門講義の最終回に、ある実験をおこなった。人間の認知に関する現象がなぜ起こるかを説明したいいくつかの文章を読ませて、その良し悪しを判定してもらおうというものだ。

説明文は、学術的に妥当なものとは不適切なもの二種類があり、さらにそれぞれが科学的用語を含むものと含まないもの二種類ずつ、計四種類が用意された。二種類の妥当な説明の内容は、科学的用語の有無を除けば、まったく同じものである。不適切な説明も同様。これらを比較することにより、科学的用語の有無が、読み手への説得力にどのように影響するかを測定できるというわけだ。

A 脳神経科学を学んだ経験のない一般人は、不適切な説明であっても科学的な用語が加わっていると、説明の内容部分は同じなのに、科学用語がない説明より高く評価した。

B それに対して専門家は、科学的用語の有無にかかわらず、不適切な説明文は低く評価した。さらに、適切な説明文に科学的用語が加わったものは、その科学的用語の内容が不正確であり説明内容に適していないとの判断から、科学的用語がない説明よりむしろ低く評価した。

C しかし、脳神経科学入門の講義を半年間聴いてきた学生たちは、専門家とは真逆の反応を示した。一般の素人と同じく、不適切な説明文でも科学的用語があれば、そうでないものより高く評価し、さらにあることか、適切な説明文でも科学的用語が加わったほうを、より優れた説明と評価したの

だ。これは、専門家の判定とは正反対だ。

③、脳神経科学の知識をもっていることと、それらの知識を適切に使うこととは、まったく別の能力なのである。むしろ、知識があることがその適切な使い方を妨げ、その知識を使わないほうがより適切な場面でも知識を使ってしまう誘惑に、ほくたちは駆られている。知識は、使うように使うようにと人を誘惑し、幻惑する。

この研究は、その後も追試や関連研究が続けられており、二〇一六年には、知識の誘惑幻惑効果は脳神経科学に限らず、物理学や数学、心理学などでも広くみられることが報告されている。⁽⁵⁾ 普遍的かつ強力なのだ、知識の魔力は。

この知識の誘惑幻惑効果は、二つのことを示唆している。

ひとつは、説明を受ける側が、内容の妥当性を問わず、一見科学的な装いをまとっただけの説明のほうを好んでしまうということ。もうひとつは、説明をする側がなまじ科学的な知識をもっていると、実際にはその知識を当てはめるのが不適切な場合でも一見科学的な説明をしがちになってしまうということ。

科学的な根拠が明確でないことにまであたかも科学的根拠があるかのように語ることは、良いことではない。それはもはやトンデモ科学、疑似科学であり、医学の領域でそのようなインキ治療法が語られると、人の生き死にに関わる暴力的な行為となる。

だが、ほくたちは仮にそれがインキであつても、科学的「であるかのような」説明を喜んでしてしまうし、喜んで受け取ってしまう傾向をもっているのだ。

かといって、専門家が科学的に厳密であろうとすればするほど、その言明は条件付き、留保付きのものにならざるをえず、日常生活場面での行動指針としては「くその役にも立たない」ことになりがちだ。⁽⁶⁾ 科学的な言明は、日常生活場面で使える形に「翻訳」しないと使えないことが多いからだ。これは、「科学者は断定しないから、科学的な成果をどう活用したら良いかわからない」という知識の表現の形の問題だけではなく、科学的知識を日常生活場面の「どこ」に、「どのように」「当てはめることができるのか、という適用範囲と形態の問題でもある。そして、科学で必要とされる知識と日常生活で必要とされる知識とは、そもそも性質が根本的に異なるのである。

(佐倉統「科学とはなにか」による)

(注1) 言明＝言葉ではっきりと述べること。

(注2) 還元＝ここでは、より複雑なことをより単純なことから派生したものと説明すること、の意。

(注3) 誤謬＝まちがひ。

(注4) 無理筋＝理屈に合わない考え方。

(注5) トンデモ科学＝一見、科学のように見えるが、まったく科学的ではない考え方。

問1 空欄①、②、③に入る語として適当なものを、それぞれ次のアからエまでのの中から選べ。ただし、同じ記号は二回使わない。

ア しかし イ やがて ウ たとえば エ つまり

問2 本文中の、なまじ、あたかも の意味として適当なものを、それぞれ次のアからエまでのの中から一つ選べ。

(a) ア 必要以上に イ 中途半端に ウ 不自然に エ 自分勝手に

(b) ア 軽々しく イ ことさら ウ 無理に エ まるで

問3 本文中に、研究成果の受け取り手として、専門家以外の人を含まざるをえない状況が現出している。とあるが、なぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 生命に関わる科学の領域が広がるにつれ、専門家以外の人も、科学の研究成果を人間に直接関係するものとして受け取るようになったから。

イ 医学と生命科学が融合した生命医学では、観測者と観測対象の境界が明確でないため、専門家以外の人も研究に参加しやすくなったから。

ウ 物理学や天文学では科学者が観測者であるが、生命に関わる科学では一般市民が観測者となり、研究成果に直接関与するようになったから。

エ 生命科学の発展にともなって、人間も研究対象となったため、専門家以外の人も観測者となると同時に研究成果の受け取り手となったから。

問4 本文中に、オキシトシンが出て気持ちが落ち着くことと、その状態を積極的に求めるべきだということのあいだには、じつはなんの論理的つながりもない。とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 「オキシトシンが出ると気持ちが落ち着く」のが科学的事実として興味深いからといって、「オキシトシンが出る状態にして気持ちを落ち着かせるべきだ」という意見に誰もが賛成するわけではない。

イ 「オキシトシンが出ると気持ちが落ち着く」という科学的事実から、「オキシトシンが出る状態にして気持ちを落ち着かせるべきだ」という価値判断を含んだ考えが必然的に導き出されるわけではない。

ウ 「オキシトシンが出ると気持ちが落ち着く」という科学的事実是一般社会で常に見られるとは限らないので、「オキシトシンが出る状態にして気持ちを落ち着かせるべきだ」という主張の根拠にならない。

エ 「オキシトシンが出ると気持ちが落ち着く」という科学的事実が生命科学の研究成果であり、「オキシトシンが出る状態にして気持ちを落ち着かせるべきだ」という医学的な見解とは直接結びつかない。

問5 本文中に、今の世の中、科学的事実の少なくとも一部は、社会的価値と無関係ではいられないのだ。とあるが、なぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 科学者ばかりでなく、一般市民も科学的な知識にもとづく説明を求める傾向があるから。

イ 二〇世紀になると、心理現象の研究成果の一部が社会一般に知られるようになったから。

ウ 科学的な研究の価値は、それが社会生活に及ぼす影響の大きさによって測られるから。

エ 科学的知識や技術が社会に影響を及ぼすことを、科学者が意識せざるを得なくなったから。

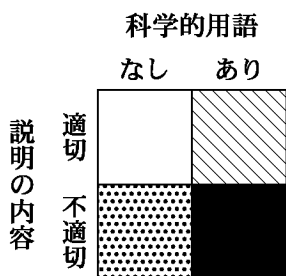
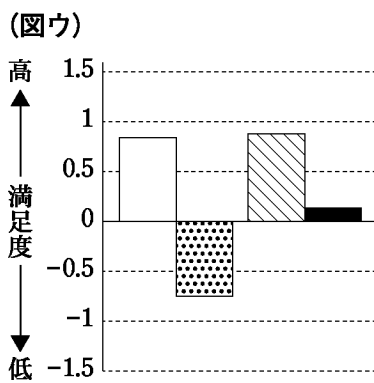
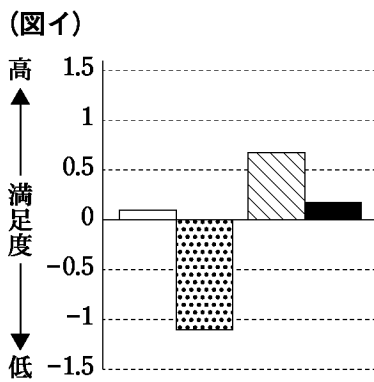
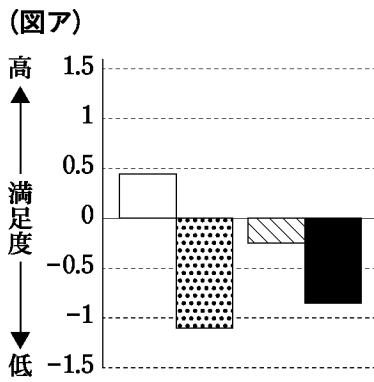
問6 本文中に、ある実験を行った⁽⁴⁾とあり、その実験結果が破線部A（一般人）・B（専門家）・C（学生）に分けて説明されている。実験結果の説

明A・B・Cに対応する図を、それぞれ後の図ア・図イ・図ウの中から選べ。ただし、同じ記号は二回使わない。

A 脳神経科学を学んだ経験のない一般人は、不適切な説明であっても科学的な用語が加わっていると、説明の内容部分は同じなのに、科学用語がない説明より高く評価した。

B 専門家は、科学的用語の有無にかかわらず、不適切な説明文は低く評価した。さらに、適切な説明文に科学的用語が加わったものは、その科学的用語の内容が不正確であり説明内容に適していないとの判断から、科学的用語がない説明よりむしろ低く評価した。

C 脳神経科学入門の講義を半年間聴いてきた学生たちは、専門家とは真逆の反応を示した。一般の素人と同じく、不適切な説明文でも科学的用語があれば、そうでないものより高く評価し、さらにあるうことか、適切な説明文でも科学的用語が加わったほうを、より優れた説明と評価したのだ。これは、専門家の判定とは正反対だ。



問7 本文中に、普遍的かつ強力なのだ、知識の魔力は。(5)とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 科学的知識には不思議な魅力があるため、説明をする側である科学者はそれらを使いたい誘惑にかられ、また説明を受ける側である一般市民も、科学者に科学的用語をできるだけ多く使うよう要望する傾向がある。

イ 科学的知識には人を惑わす強い力があるため、一見科学的な装いをまとっただけの説明が適切か否かを判定することは、説明を受ける側の一般市民だけでなく科学的知識を持った専門家にとっても非常に難しい。

ウ 科学的知識には、それを使うのが不適切な場合でも使いたい気持ちにさせるとともに、科学的用語があるだけで説明を受ける側を満足させてしまう不思議な力があり、その力は様々な分野で人に影響を及ぼしている。

エ 科学的知識には、それを使わない方が適切な場面でも使うようにと人を誘惑するとともに、科学的知識を持つ専門家も幻惑して知識を適切に使えなくさせる強い力があり、その力は幅広い分野で人を混乱させている。

問8 本文中に、科学的な言明は、日常生活場面で使える形に「翻訳」しないと使えないことが多い。(6)とあるが、なぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 科学的な言明は、そのままでは日常生活場面のどこにどう当てはまり行動指針としてどう役に立つのか、一般市民にとってわかりにくいから。

イ 日常生活で科学的知識を使おうとする一般市民は、科学的用語が含まれるだけで満足し、科学的な言明の真の意味を理解しようとしなから。

ウ 専門家は、様々な条件を考えて厳密に科学的な言明を発しようとするが、日常の生活場面は複雑であって専門家の想定を超えてしまうから。

エ 厳密な条件や留保が付いた科学的な言明は、表現の性質が日常の言葉とは異なるために、日常の行動指針としてはまったく役に立たないから。

3

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

浩弥は絵を描くのが好きで、高校卒業後はデザイン学校に進んだが、三十歳になった今も就職ができずにいた。高校三年生の時に埋めたタイムカプセルを開封するための同窓会で、作家志望だった友人・征太郎と再会し、彼が今も創作を続けていることを知る。たまたま立ち寄ったコミュニティハウスの図書室で、司書の小町さんに「進化の記録」という写真集をすすめられ、浩弥はそれを閲覧するために図書室に通うようになった。

「……ダーウィンって、ひどい奴じゃないですか。(注3) ウォレスが不憫だ。(注4) 先に発表しようとしたのはウォレスなのに、ダーウィンばかりもてはやされ

て。俺、この本を読むまでウォレスなんて名前も知らなかった。」

しばらく沈黙が続いた。俺はつつぶしたままで、小町さんは何も言わずにおそらく針を刺していた。^a
少しして、小町さんが口を開いた。

「伝記や歴史書なんかを読むときに、気をつけなくちゃいけないのは」

俺は顔を上げる。小町さんは俺と目を合わせ、ゆっくりと続けた。^b

「それもひとつの説である、ということ念頭に置くのを忘れちゃだめだ。実際のところは本人にしかわからないよ。誰がああ言ったとかこうしたとか、人伝えでいろんな解釈がある。リアルタイムのインターネットでさえ誤解は生じるのに、こんな昔のこと、どこまで正確かなんてわからない。」

こきん、と小町さんは首を横に倒す。^c

「でも、少なくとも浩弥くんはその本を読んでウォレスを知ったよね。そしてウォレスについて、いろんなことを考えている。それってじゅうぶんに、⁽¹⁾この世界にウォレスの生きる場所を作ったということじゃない？」

俺がウォレスの生きる場所を？

誰かが誰かを想う。それが居場所を作るということ……？

「それに、ウォレスだって立派に有名人だよ。世界地図には、生物分布を表すウォレス線なんてものも記されてる。彼の功績はちゃんと認められてると思うよ。その背後には、どれだけたくさんさんの名も残さぬ偉大な人々がいただろうね。」

そして小町さんは、おでこに人差し指を当てた。^d

「それはさておき、『種の起源』だ。あれが発行されたのが一八五九年だと知ったときに、私は目玉が飛び出るかと思った。」

「え、なんで。」

「だって、たった百六十年前だよ。つい最近じゃないの。」

つい最近……。そうなのか。俺が眉を寄せて考え込んでいると、小町さんは頭のかんざしにそっと手をやる。

「五十歳近くになるとね、百年って単位が短く感じられるものだよ。百六十年なんて、がんばれば生きてそうだもん、私。」

それには納得がいった。生きていそうだ、小町さんなら。

ざくざく、ざくざく。小町さんが無言になって、毛玉に針を刺しはじめ。

俺は本に目を落とし、ウォレスのそばにいたであろう名も残さぬ人々のことを想った。

コミュニティハウスを出たところで、スマホが鳴った。

征太郎からの電話だった。友達からの電話なんてほほかかかってきたことがなくて、俺は立ち止まり、緊張気味に出た。

「浩弥、僕……僕……」

スマホの向こうで征太郎が泣きじゃくっている。俺はうろたえた。

「どうしたんだよ、おい、征太郎。」

「……作家デビュー、決まった。」

「は？」

「実は、年末にメイプル書房の編集さんからメールがあったんだ。僕、秋の文学フリマで小説の冊子を出していて、それを読んでくれた崎谷さきたにさんって人から。何度か会って打ち合わせして、少し手を入れる方向で、今日、企画が通ったって。」

「す、すげえ！ よかったじゃん！」

震えた。

すげえ、ほんとにすげえ。夢かなえちゃったよ、征太郎。

「浩弥に、一番に言いたかったんだ。」

「え。」

「僕が作家になれるわけないって、きつとみんな思ってた。でも高校のとき、浩弥だけは言ってくれたんだ。征太郎の小説は面白いから書き続けろって。浩弥は忘れちゃったかもしれないけど、僕にとってはそのひとことが原動力で、最強に信じられるお守りだったんだ。」

征太郎は大泣きしていたけど、俺も涙があふれて止まらなかった。俺の……俺の小さなひとことを、そこまで大事にしてくれてたなんて。

でも、征太郎が書き続けて発表し続けてこられたのは、そのせいだけじゃない。きつと、征太郎の中に自分を信じる気持ちがあったからだ。

「じゃあ、もう水道局員じゃなくて作家だな。」

鼻水をすすりながら俺が言うと、征太郎は「ううん。」と笑った。

「水道局の仕事があったから、小説を書き続けることができたんだ。これからも辞めないよ。」

俺はその言葉を、頭の中で繰り返した。どういう意味だろうと考えてしまうような、でも理屈じゃなくすごくわかるような。

「今度、お祝いしような。」と言って、俺は電話を切った。

俺は興奮して、ぐるぐるとコミュニティハウスの周りを歩いた。鉄の柵の前に、やっとふたり座れるぐらいの小さな木のベンチがあった。そこに腰を下ろす。

柵の向こうに小学校の校庭がある。併設とはいえ、こちらからは入れないようになっている。放課後なんだろう、子どもたちがジャングルジムに登って遊んでいた。

二月の終わりの夕方、だいぶ日が長くなっていた。

俺は気持ちを落ち着かせながら、ジャンパーの両ポケットに手をつ込んだ。

左にタイムカプセルの紙、右に小町さんがくれたぬいぐるみ。

どちらも入れたままになっていた。俺はふたつとも取り出し、それぞれの手に載せた。

飛行機。誰もが知ってる文明の①器。大勢の客や荷物を乗せて空を飛んでいても、今、驚く人はいない。

たった百六十年前――。

それまでヨーロッパでは、生物はすべて神が最初からその形に創ったもので、これまでもこれからも姿を変えることなんかなくて固く信じられていた。

サンショウウオは火から生まれたと、極楽鳥は本当に極楽から来た使いだ。みんな真剣にそう思っていた。

だからダーウインは発表することを躊躇ちゅうちゅうしたのだ。まさに、環境(2)に適應しない考えを持つ自分自身が淘汰たうたされることを恐れて。

でも、今や進化論はあたりまえになっている。ありえないって思われてたことが、常識になっている。ダーウインもウォレスも、当時の研究者たちはみんな、自分を信じて、学び続けて発表し続けて……。

自分を取り巻く環境のほうを変えたんだ。

⁽³⁾ 右手に乗った飛行機を眺める。

百六十年前の人たちに、こんな乗り物があるって話しても誰も信じないだろう。

鉄が飛ぶはずないって。そんなものは空想の世界の話だって。俺も思っていた。

俺に絵の才能なんてあるわけない、普通に就職なんてできるはずない。でもそのことが、どれだけの可能性を狭めてきたんだろう？

そして左手には、土の中に保管されていた高校生の俺。四つ折りにされた紙の端をつまみ、俺はようやく、タイムカプセルを開く。そこに書かれた文字を見て、俺はハッとした。

「人の心に残るイラストを描く。」

たしかに俺の字で、そう書いてあった。

そうだったっけ……ああ、そうだったかもしれない。

どこかでねじまがって、勘違いが刷り込まれていた。「歴史に名を残す。」って書いてたと思いついてた。壮大な夢を抱いていたのに打ち砕かれたって。俺を認めてくれない世間や、ブラックな企業がはびこる社会が悪いって、被害者ぶって。でも俺の根っこ、最初の願いは、こういうことだったじゃないか。

丸めようとしていた俺の絵を、救ってくれたのぞみちゃんの手を思い出す。俺の絵を、好きだって言ってくれた声も。俺はそれを、素直に受け取っていなかった。お世辞だと思っていた。自分のことも人のことも信じてなかったからだ。

十八歳の俺。ごめんな。

今からでも、遅くないよな。歴史に名が刻まれるなんて、うんと後のことよりも……それよりも何よりも、誰かの人生の中で心に残るような絵が一枚でも描けたら。

⁽⁴⁾それは俺の、れっきとした居場所になるんじゃないか。

^(あおやまみちこ)青山美智子『お探し物は図書室まで』による

(注1) コミュニティハウスⅡ小・中学校等を活用した地方公共団体の施設。

(注2) 小町さん⇨コミュニケーションテイハウスの図書室の司書。羊毛フェルトを針で刺してぬいぐるみを作るのが趣味。

(注3) ダーウィン⇨イギリスの学者。『種の起源』の著者で進化論を提唱した。

(注4) ウォレス⇨イギリスの生物学者。ダーウィンとは別に自然選択を発見し、ダーウィンが理論を公表するきっかけを作ったとされる。

(注5) のぞみちゃん⇨図書室の司書見習い。

問1 本文中の①に当てはまる漢字を、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 理 イ 利 ウ 離 エ 裏

問2 小町さんの小説の中での役割について話し合っている次の会話文のA、B、Cに当てはまるものを、それぞれ後のアからエまでの中から選べ。ただし、同じ記号は二回使わない。なお引用されているa、b、c、dについては、本文中に破線で示してある。

生徒1 小町さんは、気づかいがある人みたいだね。 d 「小町さんは、おでこに人差し指を当てた。」は、浩弥を少しリラックスさせようとして、話題をうまく変えているみたい。

生徒2 d 「小町さんは、おでこに人差し指を当てた。」に続く言葉は少し冗談っぽいけど、 A

生徒3 でも、真面目なときは真面目だね。 b 「小町さんは俺と目を合わせ、ゆっくりと続けた。」は、すぐまっすぐな感じがする。わざわざ目を合わせて、 B

生徒1 a 「小町さんは何も言わずにおそらく針を刺していた。」ではまるで無関心そうな感じもするのに、その後を見るとちゃんと浩弥の話を聴いていて。人との距離の取り方が上手な人だね。

生徒2 浩弥の言うことを否定はしない。でも、c 「こきん、と小町さんは首を横に倒す。」に続く言葉は、 C

生徒3 年齢を重ねた大人の余裕みたいなものを感じるね。

ア 知らない他人まで悪く言う浩弥の視点を変えて、人間のいい面を見ることが大事だと伝えようとしているね。

イ 世間に広く認められることに価値があると考える浩弥に、別の見方があることをさりげなく伝えているね。

ウ ゆったりとした時間の捉え方を示して、いらだっていた浩弥の気持ちを落ち着かせようとしているね。

エ 自分の思い込みにとらわれがちな浩弥に確実に言葉を届けることで、彼の視野を広げようとしているね。

問3 本文中に、この世界にウォレスの生きる場所を作った⁽¹⁾ とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア ウォレスの進化論を学んだ人間が世間に出ていった分だけ、ウォレスという人間がいたことを知る人が増え続ける。
- イ ウォレスの考えを理解している人間がいる分だけ、ウォレスという人間が地球上に残した学問的価値が増し続ける。
- ウ ウォレスの説が正しいと認める人間が増えた分だけ、ウォレスという人間が残した功績は人々に称賛され続ける。
- エ ウォレスのことを知っている人間が増えた分だけ、ウォレスという人間がこの世界に存在した意味が残り続ける。

問4 本文中に、環境に適応しない考えを持つ自分自身が淘汰される⁽²⁾ とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア ある社会が認めようとしないう考えを持つ者が、その社会から迫害を受けてしまう。
- イ 決して人に合わせようとしないう者が、付き合いくいと思われ絶交されてしまう。
- ウ まだ世界で知られていない発見をした者が、周囲から変わり者扱いされてしまう。
- エ まったく世間の常識を知らない者が、失礼な人だと思われ低く評価されてしまう。

問5 本文中に、右手に乗った飛行機を眺める⁽³⁾ とあるが、この「飛行機」は浩弥にとってどのような意味を持つものか。最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア 自分自身の考えを主張することをやめなければ、大空を飛ぶように自由に未来を開いていけることを示す希望の象徴。
- イ 自分を信じて作品や考えを発表し続けてさえいれば、いつかは必ず世間に認めてもらえるはずだという信念の象徴。
- ウ 自分自身を信じ続けた者たちの活動によって、あり得ないと思われることが現実になっていくという事実の象徴。
- エ 自分で未来の可能性を狭めてきたことで、元の自分とは全く違う存在になってしまったあげくに失われた夢の象徴。

問6 本文中に、それは俺の、れつきとした居場所になるんじゃないか⁽⁴⁾ とあるが、浩弥がそう感じたのはなぜか。最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア 浩弥の絵が好きだと言う人の言葉を素直に受け取り、才能を信じて描き続ければいつかは世間も認めてくれると気づいたから。
- イ たとえ世間に広く認められなくても、誰かの心に残る作品を描くことができれば自分の生きる意味はあると気づいたから。
- ウ 技術的に優れた作品であってもすぐに価値が認められるとはかぎらず、描き続けていくうちに評価が高まると気づいたから。

エ 絵を評価されることが自分の目的ではなく、誰にも認められなくても絵を描き続けることが自分の幸せだと気づいたから。

問7 本文の記述に関する説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 世間や社会を恨んで他人を責めてばかりいた浩弥が、進化論の思想や文明の変遷に目を向けることで、自分が表現し続けることの意味に気づき、世界を変えるため進み出そうと決意する場面である。様々な物体が比喩的な意味を持って登場し、間接的に人物の内面を表現している。

イ 社会に背を向けていた浩弥が、小町さんやのぞみちゃんの熱烈な応援をきっかけに、友人の成功にも刺激を受けながら、少しずつ前を向いていこうとする場面である。自然科学と人工物の進化に目を向けることで、閉じていた浩弥の心が少しずつ開かれていく様子を表現している。

ウ 人に出し抜かれてばかりの世間に嫌気がさしていた浩弥が、夢をかなえた友人の言葉と、ぬいぐるみの飛行機やタイムカプセルのおかげで、再び自分を信じることを思い出す場面である。色々な「作品」と学問上の発見とが連想によってつながれ、進歩し続ける世界が描かれている。

エ 自分の世界に閉じこもっていた浩弥が、図書館で紹介された本や小町さんの言葉、旧友との交流を通じて、本当に望んでいたことを思い出し、生きる力を取り戻す場面である。断片的に描かれた様々な出来事が組み合わせられ、答えにたどり着くまでの心情が丁寧に描かれている。